

## 新書紹介

### 都市と保存——保存の経済学 上・下

都市住宅編集部編

鹿島出版 菊倍版 各384頁 50年4月刊

各2,200円

敗戦の焼跡から、日本国民はそれこそ死力をふりしぼって働き、驚異的な経済復興をなしとげた。しかし、その結果得られたものはゴミと公害だけという悲喜劇を演じているのが今日のわれわれの姿である。住宅は公・私とも考朽化がはなはだしく、耐久消費財ははや財産価値はなくしている。ストック（財産）をのこそうとあせりにも似た気持でとびついたのが土地であろうか。経済的、機能的減価償却のスピードアップ化は経済の仕組そのものになっている。日本民族と日本国土の総ポンコツ化もそう遠い将来のこととは思われないのである。

月刊誌「都市住宅」の74年特集テーマをまとめたこの本では、そういった問題認識から、とくに建築の保存とか歴史的風土とかいったものを残存価値という側面から見直してみようと意欲的な試みをしている。京都、倉敷、明治村などのおなじみのものの特集もあるが、丸の内、文化都市熊本などが興味深い。

日本資本主義の総本山である丸の内かいわいの銀行は、最近目につくノッポビルとは対照的に、たっぷりと金をかけた建物だということは、建築家の眼を通してわれわれに分りよく説明してくれている。これら、保存の価値ある建物は大方、大法人の所有である。これを市民の側から保存を訴えることが愚劣であるという意見と、いや利用者のものであるという側面から保存すべきであると

いう意見のはざまに保存哲学の磁場が生じ、運動が起きるのであろうか。文化都市熊本のケースはこれらの市民保存運動の一つの方向を示していると思われる。最近はやりのコミュニティーづくりも、自分の身の廻りを見廻わして、今まで気づかなかったものに新鮮なものをみつけだすことから始めるのも一方法であろうか。それはさておき専門家が価値ある建物を適確に市民に知らせる。それに市民が反応する。この交流をささえる核が、日頃市民が見慣れている建物であることが、運動をいっそう確かなものにする。横浜市にこのような保存運動の可能性があるのかどうか考えながら読むとその興味はつきない。

古きよきものの保存はいいことだというだけでとどまることはできない。いったい誰が蓄積し、誰が保存するのか、つまり責任は誰が担うのかが決まらなければならない。個人、企業、公的機関にそれぞれ分担させなければならないが、まだ有効な保存の分担責任の原則がみい出せないのが現状であろう。しかし、今あきらかなことは、企業の利潤計算体系の肥大化傾向をそのままにしておいては、人も物も残存価値がゼロになってしまう危機と、企業活動を追認して産業基盤の拡大に狂奔している国もあまりあてにできないということである。

残存価値のあるものをつくり、それを残してゆくという動機において若干のロマンチックな運動は、存外気の遠くなるほどの長い期間と大変なエネルギーを要するたたかひになりそうである。また、このような課題は、フローの拡大に専念してきた、維持管理思想の欠如している役人、いや日本民族にとって最も苦手なものの一つであることも明らかである。皆様の一読をすすめたい。

〈企画調整局プロジェクト室主査 高橋敏美〉